

Latest Stories

最新記事

アメリカ

帰還後に自殺する若き米兵の叫び

'We Pretend the Vets Don't Even Exist'

アメリカで自殺する元兵士は毎日18人前後に上る。彼らはなぜ故郷で死を選ぶのか、元海兵隊員の筆者が探る帰還兵たちの心の闇

2012年8月7日（火）

アンソニー・スウォフォード（作家）

退役軍人省カナンデグア支部（ニューヨーク州）にある電話相談室。相談員のメリッサが電話に出ながら、私を見てささやいた。「この人今、『5号線のど真ん中に飛び出して、何もかも終わらせたい』って言ったわ。『こんな人生、生きてる価値ない』って」

電話の主は4カ月前に海兵隊を除隊した若者。仕事もカネもなく、朝から何も食べていないという。ペンドルトン海兵隊基地と仲間のそばにいたくて、父親のトラックで田舎からカリフォルニアに出てきたが、仲間のほとんどは再び外国に送られたか、海兵隊を離れていた。

酒に溺れるようになり、マリファナを吸うことも少なくない。海兵隊には4年いて、イラクにも2回行った。でも除隊後は定職が見つからない。そして今、海兵隊基地近くのサービスエリアに座り込み、いっそのこと死んでしまいたいと思っている。

メリッサは幼稚園の先生のような温かさと、アメリカンフットボールの選手のような冷静な判断力、そして金髪に青い目といういかにもアメリカ人的ルックスの持ち主だった。彼女はパソコンの画面を見ながらほほ笑み、うなずきながら、若者に語り掛けた。

画面にはその日、彼が既に2回電話してきたことが示されている。「助けを求

めるって大切なことなのよ。この番号にかけてきただけでも、とても勇気ある行為だわ」。そう言いながら、メリッサは医療スタッフにメールを打った。この青年には専門家による助けが必要だ——。

だが連絡を受けた医療スタッフは、5号線やペンドルトン海兵隊基地がどこにあるのか見当もつかない様子だ。南カリフォルニアのサンディエゴ北部だと、私は教えてやった。ちょうどその日の朝、私はサンディエゴから飛行機で来たのだった。

「考える時間はたっぷりあるのよ。4カ月で答えを出すことなんてないの」と、メリッサは彼に言い聞かせた。医療スタッフはカリフォルニア州の911（緊急通報）センターに通報して、救援活動をスタートさせる。私もサンディエゴにいる妻に電話して、若者を捜しに行かせようかと思った。

戦場での警戒心が日常に

アメリカでは毎日18人前後の元兵士が自ら命を絶っている。アフガニスタンとイラクからの帰還兵だけでも自殺者は数千人にも上り、戦闘中の死者数（6460人）を上回るとみられている。

計11年にわたる2つの戦争は、米軍に大きな負担を強いてきた。イラクかアフガニスタンのどちらかに送られた兵士の数は推定230万人。このうち80万人は2回以上派遣されている。

ポートランド州立大学（オレゴン州）のマーク・カプラン教授（地域保健学）が、全米暴力死報告システムのデータに基づき語ったところによると、男性帰還兵の自殺増加率は一般男性の2倍、女性帰還兵の自殺率は一般女性の3倍に上る。また元兵士が自殺に銃を使う可能性は、一般人よりも60%高い。

なぜ若い元兵士の自殺がこんなに多いのか。

92年、私は「彼ら」の1人になりかけた。海兵隊に4年いて、湾岸戦争のときはクウェートで戦闘に参加した。除隊して戦場での高揚感や強い連帯感が過去のものとなり、孤立感や孤独感にさいなまれて死にたくなる気持ちが、私には分かる。

私は大学に入ったものの、いつも周囲に警戒の目を光らせていた。仕事は人と接する必要がほとんどない倉庫で、夕方からの勤務を選んだ。やがて作家になったが（やはり人と接する機会が少ない仕事だ）、トラウマのない生活が送れるようになるまでには20年近くかかった。

退役軍人省と軍は、戦場で人を殺すことが兵士の心や社会性にダメージを与え、自殺の引き金になり得ることを認めながらも、だがアフガニスタンとイラクからの帰還兵に自殺者が多く、それが大きな懸念事項であることは否定できない。

少し前までは、軍での厳しい訓練や規律には自殺を防ぐ効果があると考えられていた。退役軍人省デンバー支部（コロラド州）で自殺問題を研究するピーター・グティエレスは、2回以上の戦地派遣とその間隔の短さが「自殺リスクを高めるとは言い切れないが、何らかの影響があることは否定できない」と言う。「軍事訓練にはもはや十分な自殺防止効果がないのかもしれない。ただしそれを裏付けるデータはない」

「証拠がない」は研究者や現場の人間の決まり文句だ。だが未熟な青年たちに人の殺し方を教えて何度か戦場に送り込めば、帰還するときには別人になってもおかしくない。彼らは武器や暴力を使って問題を解決することが100%許されると思うようになっている。

軍の医療関係者の多くが口を閉ざすなか、率直に話してくれた医師が2人いた。1人はベトナム戦争時代から帰還兵を診てきたジョナサン・シェイ医師。シェイは、現代の兵士は戦場に2回以上送られることで、道徳観念にダメージを受けると言う。

無視される帰還兵の存在

戦場で失敗をしたり、上官から適切な指示が与えられなかったりすると、兵士は戦場の強烈なストレスに対処するため、仲間への信頼や善悪の観念を捨てる。連続的な派遣でそれが繰り返されると、その心理状態は一種の癖になる。だから平和な生活に戻っても、異常に警戒心が強く、誰も信用しない。そして生きていくのがつらくなる。

一方、スタンフォード大学ストレス保健センターのデービッド・スピーゲル医師は、政府のせいで国民が戦争の現実に対して無知になったと語る。「帰還した兵士たちは、自分が理解されていないと感じている」

外国で戦死した兵士の棺は、デラウェア州のドーバー空軍基地経由で故郷に運ばれる。だがブッシュ政権は、基地に到着した棺の写真公開を禁じた。そうすると国民はこうした写真を目にする機会さえないから、戦死者や戦争について考えるきっかけを1つ失うことになる。

ベトナム戦争中は戦争がアメリカ文化の中心になったとスピーゲルは指摘する。戦場で戦っている兵士も、戦争賛成派も反対派も、みんな戦争のことを気に掛けていた。兵士は抗議の対象になるほうが、無視されるより心理的にましだったのかもしれない。「今のアメリカでは帰還兵は存在すらしめないかのようだ」とスピーゲルは言う。

戦争の暴力が自殺の一因である可能性も捨て切れないという。「暴力の一線を一度越えたら、再び越えるのは簡単だ。殺人と自殺は大違いたが、殺すことには変わらない」

多くの退役軍人とその家族が退役軍人省に頼らず自力で対処してきた。「精神的な問題から何年も目を背けていた」とダン・ウェストは言う。

ウェストは09年、米陸軍第214砲兵旅団の広報要員としてイラクに従軍。赴任から1週間もたたない頃、近くの村で行われた医療活動取材した。写真を撮り、医師たちの活動を見守っていると、女性が2歳の男児を抱いて現れた。男児はほぼ全身にやけどを負っていた。

ウェストは気が動転してその場を離れた。しかし戦場の悲惨さに慣れるのに時間はかからなかった。1週間後には、12歳くらいのひどい栄養失調の男児を抱いた老人を写真に収め、すぐに次の任務に移った。そのときの写真は自宅の冷蔵庫に貼ってある。戦争で自分が見たものを忘れないためだ。

「帰還後の精神状態の検査では部隊全員で従軍牧師の面接を受けた。何か問題はるか聞かれて、みんな問題ないと部隊長が答えた」とウェストは言う。

ウェストは故郷のモンタナ州に戻ったが「戦闘中のように振る舞うことがあった」。軍の勧めで、ラスベガスで週末に行われる社会復帰プログラムを3回受けた。「支援制度を悪く言いたくはないが、自宅は部隊から1600キロも離れていた。自宅近くのプログラムを紹介してもらえなかった」

ウェストをはじめ多くの予備役兵や州兵が、部隊の解散で複雑な状況に直面する。予備役兵は戦地から戻って数週間で民間の職場に復帰する。

民間人に戻って3年後、ウェストはようやく地元で仲間を見つけた。イラクに従軍した元兵士らが創設した「Xスポーツ・フォー・ベッツ」のおかげだ。

この団体では元兵士同士が「エクストリーム（極限）スポーツ」を通じて、職場や学校や家庭では得られない仲間意識とチームワークを育む。「エクストリームスポーツは通常の生活では必要のない高度な集中力を必要とする」と、創設者の1人でセラピストのジャナ・シェリルは言う。「注意力が向上するので、元兵士たちが有意義な交流をする一助にもなる」

Xスポーツ・フォー・ベッツは命の恩人だとウェストは言う。

助けを求めない兵士たち

退役軍人省はようやく、心的外傷後ストレス障害（PTSD）と自殺傾向の検査を始めた。単に親指を骨折して病院に駆け込んだケースも検査対象になる。医療提供者は適切な質問をし、重大な心理的問題の兆候がないか探らなければならない。元兵士に過度の飲酒や薬物乱用、不眠、失業、孤立が見られたら、問題を抱えている可能性が高い。

全米精神障害者連盟（NAMI）モンタナ州支部のマット・クーンツは、精神疾患に付きまとう悪いイメージが兵士や退役軍人の受診を妨げていると考えている。陸軍士官学校を卒業したクーンツによれば、「手足にマメができて恥

と考えるのが歩兵部隊だ。退役軍人が自分から助けを求めると思うか？ 検査は強引なくらいに、何度も繰り返しやるべきだ」。

米傷痍軍人会など退役軍人の団体は絶えず、デジタル時代に対応したサービス向上を退役軍人省に求めている。支援活動を通じて問題を抱える元兵士を見つけ出す作業は退役軍人省の仕事の根幹だ。

しかし支援制度だけでなく、多角的なアプローチが必要だろう。カリフォルニア大学ロサンゼルス校医療センター精神科の研修医で、退役軍人病院のPTSD外来に勤務した経験を持つジェシー・ルーは、「持続エクスポージャー療法」を提案する。

この療法は、患者にトラウマと向き合わせ、その記憶に慣れさせるというもの。患者はテープレコーダーに向かって最もつらいトラウマについて語る。途中でセラピストが質問をして誘導することもある。トラウマについてできる限り詳細に、五感をフル活用して語らせることが重要だ。患者は録音した内容を1週間毎日聴く。これを3カ月間繰り返す。

患者を日常生活最大のストレスと向き合わせることは簡単ではない。それでも「続けられれば効果がある」とルーは言う。

なぜ傷ついて帰ってくる兵士とそうでない兵士がいるのか。「それが分かればいいのだけど……」とルーは黙り込む。「初診でPTSDの診断を下すのは、統合失調症の診断を下すのと同じくらい難しい。従軍前とはすべてが変わってしまった。彼らは国のために思って従軍し、ぼろぼろになって帰ってきた」

周囲のサポートが不可欠

90分後、メリッサはまだ自殺志願の若い元海兵隊員と電話で話している。ラッシュアワーで交通量が多く、ハイウエーパトロールは誤って別のサービスエリアに向かってしまった。私は妻に電話してその若者を見つけさせようかと本気で考え始めた。

「希望を売るのが仕事」だと別の電話相談員は言う。昨年かかってきた電話は16万4000件。うち6760件を自殺から救った。2300件が現役の兵士から、1万2000件が退役軍人の友人や家族からの電話だった。

ようやくメリッサが医療補助スタッフに笑顔を向け、電話の相手に呼び掛ける。「よかった。大丈夫？ 海兵隊基地から来た憲兵？ OK。その人たちに替わって」

「来てくれてありがとう」メリッサが憲兵に言う。「彼には助けが必要な」

[2012年6月6日号掲載]